

介護福祉士の養成課程における共感の理解に関する一考察

One Consideration about the Understanding of the Empathy  
in the Training Process of the Care Worker

奥田 眞紀子

OKUDA Makiko

# 介護福祉士の養成課程における共感の理解に関する一考察

## One Consideration about the Understanding of the Empathy in the Training Process of the Care Worker

奥田 眞紀子

OKUDA Makiko

本稿では、介護福祉士養成施設（保育士養成施設等卒業者1年課程）に在籍する学生に対して、同情という視点から共感を概観し、共感経験尺度改訂版と質問紙による調査、および事例を通しての検討を行った。その結果、同情の傾向の強い共有型がもっとも多く、共感と同情の概念も曖昧であることがわかった。また、実習前と実習後と比較すると、自己評価による共感する力は実習後に低下が見られた。しかし、それは同情という概念を通して、今まで共感していたと考えられていたことに疑問を感じ、場面を再構築するきっかけとなったことによるものであることが考察された。

キーワード：共感、同情、共感経験尺度改訂版

Key Words: Empathy, Sympathy, Empathic experience scale revised

### I. 問題と目的

#### 1. 先行研究からみた共感、同情および共感経験尺度改訂版について

共感という概念をDavis (1994) は、他者の立場で物事を見るという認知的な役割取得と他者への感情的な反応（共感的配慮）という2つの現象からなると定義し、澤田 (1996) は、共感を単なる他者理解という認知過程ではなく、認知と感情の両方を含む過程であり、他者の感情の代理的経験あるいは共有を必ず伴うものとして定義している。そしてこれらの概念は、人と人とかかわるうえで、意識、無意識を問わず、「いまそこ」で起きているありようを考えるときの基礎となるものである。それゆえ、心理、福祉、教育、医学、看護等各分野においても数多くの様々な研究が行われている。心理の分野における研究を概観すると、Rogersの理論をもとに共感的理解について実践的な検証のなかでその意義について述べたもの、また、H

offmanの共感の生起過程と発達に関する理論にもとづく共感と向社会的行動についてのさまざまなモデルの構築をおこなったものがある。さらに、共感の測定に関するものや、共感に関連する概念を含めた包括的なモデルを使いその整理を行ったものなどが存在する。そしてこれらの研究の共通の意義は、カウンセラーがクライアントを理解するために役立つ点であるといえる。

共感とは心理分野のみならず、対人援助職として携わるものには必要な概念であり、それは介護福祉士にも共通しているといえる。しかし、共感という相手との間に生まれる極めて評価が困難な理解について、学生がいとも簡単に「共感できた」と表現することが多く、その場面を振り返ると、同情との混在が伺えることに多く出会った。

共感についての文献は数多く存在するが、同情については、心理領域において少なく、論文として表題に

あがっているものには、倫理、哲学、文学分野に多く見受けられた。そんな中、高島（1908）は、人が社会生活を営む上で必要不可欠なものは同情であり、同情の意味するところでは、同情の情という字は「なさけ」と訓読みするが、これは「中裂け（なかさけ）」の約音であり中心裂けるように思う感情である。同情は、他者の苦楽の表出を見聞して、自己もこれと同様に苦楽を感じる作用である。他者の幸福に対する同情は同慶と呼ばれ、他者の不幸に対する同情は同苦と呼ばれる。一般的に他者の幸福に対して同情は起こりにくく、時として、猜忌（さいき）、嫉妬のような反社会的感情を引き起こすこともある、と記している。

角田（1994）は、共感性を測定する目的で作成した共感経験尺度（Empathic Experience Scale:略称EES）を改訂する過程において、悲しみといった否定的な感情表出に対する際、EESの高得点者の中に共感と同情が混在することを見出し、同情に着目した。ここでいう同情とは、共有体験はなされているが、他者理解としての共感には至らない反応で、共有体験をしながらも、自己中心的な観点から自らの体験を捉えるため、他者を理解する方向でその体験を捉えられないものであると示した。そして角田は共感の概念規定を「能動的または想像的に他者の立場に身をおくことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること」とし、特に強調されるべき点は「自分とは異なる存在である他者」にあり、自己と他者の個別性が認識されることによって共有体験が他者理解につながる、と考察した。こうしたなかで、角田は、EESが共感体験のみを問う形式であるため、自己の共有体験を他者理解に生かせない同情反応と、共感反応が識別されにく

いとし、より広く「共有経験」を測定する尺度として、逆の体験である共有不全経験を問う尺度を作成した。共感者では個別性の認識が高いため、他者の気持ちがわからなかった経験を明確に意識することができるが、同情者では、自己中心的な自他認識により、その経験そのものが意識されにくい。したがって、共有経験と共有不全経験の両面を測定することによって、自他の個別性のあり方の評価が可能となり、共感と同情を識別できるとした。そこで、「共有経験因子」と「共有不全因子」の2因子を抽出して共感経験尺度改訂版（Empathic Experience Scale Revised:略称 EESR）を作成し、2軸の高低の組み合わせから、表1に示す4つの共感性の類型を想定した。

## 2. 本研究の目的

本稿で取り上げる介護福祉をとりまく社会はさらに複雑となってきている。団塊の世代が前期高齢期を迎え、後期高齢者では発病率が8%を超えている認知症の増加により、個人に応じた、個性を尊重する介護が必要とされている。そのため、介護福祉士には、多様な価値観とさまざまな疾病の病態像を持つ対象者のニーズを専門職として捉え、利用者が納得し満足するかかわりが求められている。そして、それらの個人および社会のニーズに応えることのできる介護福祉士を養成することが、養成施設の責務である。

養成課程において、実際に施設等で利用者とは直接かかわりを持つ介護実習は、1段階～3段階に分けて合計360時間が義務づけられており、1年課程（保育士養成施設等卒業者）で資格取得に必要な930時間の約38%を占める科目である。学内での学びを介護実習で統

表1 角田（1994）による共感性類型

両向型	共有経験、共有不全経験ともに高く、他者理解を可能にするもっとも高い共感性
共有型	共有体験は高いが、個別性の認識は低く、共感体験を自己にひきつけてとらえてしまう未熟な共感、つまり同情
不全型	共有不全体験が高く共有体験が低い 自己と他者の間に超えがたい障壁があり、その意味で孤独感もちやすい
両貧型	両方の経験が少ない 対人関係そのものが弱く、共感性がもっとも低い

合させ、実習終了後には振り返りを行い、学びを自己の中に落とし込んでいくこの科目は、カリキュラムの中核をなすものといえる。

また、松本ら（2001）の「実習指導者が考える臨地実習で学生に学んでほしいことは何か」という論文において、最も数値が高かった項目は、対象の全人的理解（対象を疾患とともに生活者として、全人的に理解する。対象の人生観、価値観を理解する。）という結果が示されている。また鈴木（2007）は、介護福祉士の実習指導者は指導にあたり、利用者本意の意識、個別ケアの意識、豊かなコミュニケーション能力のスキルの研鑽の意識をポイントにおいている、と述べている。

そこで本研究では、全人的理解、利用者本意、個人・個性の尊重、コミュニケーション、というキーワードに共通して必要とされる概念である共感に着目した。共感の定義や共感性についての自己評価および同情とのちがいを質問紙にて問い、また、共感性を客観的に測定し、かつ同情的な傾向もあわせて分類できる共感経験尺度改訂版を使い、共感という概念が学生の中でどのように変化し培われていくのかを実習の前後で比較し、共感性が深まる指導内容の視座を得ることを目的とした。

## II. 調査方法

### 1. 調査協力者

介護福祉士養成施設（保育士養成施設等卒業者1年課程）に在籍する学生20名

（男子5名、女子15名 平均年齢21.15歳）

### 2. 調査時期

2007年5月（第1段階実習前、以下では実習前と記す）

2007年12月（第2段階実習後、以下では実習後と記す）

### 3. 調査内容

#### 1) 共感経験尺度改訂版

#### 2) 共感についての質問紙

- ① 共感とは何か。あなたの考えを述べて下さい。
- ② 共感と同情のちがいについて、あなたの考えを述べて下さい。（実習後のみ）

③ あなたの持つ「共感する力」について、対人援助職として全くないを「1」で、十分にあるを「5」であらわしたとき次の中で自分にあてはまる数字に○をつけて下さい。（1, 1.5, 2, 2.5, 3, 3.5, 4, 4.5, 5）

④ ③の数字を選択した理由を述べて下さい。

⑤ 「共感する力」を高めるためにはどのようなことが必要だと思いますか。あなたの考えを述べて下さい。

## III. 結果

### 1. 共感経験尺度改訂版

角田（1994）による共感経験尺度（改訂版）の共有経験尺度と共有不全尺度の統計値（被験者：大学院生、学部生、医療専門学校生302名：男子157名、平均年齢25.2歳 女子145名、平均年齢21.2歳）は表2に示し、比較の指標とした。今回の調査による集計結果は表3に示すとおりである。その結果、共有経験を示す数値は高く、共有不全経験を示す数値は低いという結果となった。

また、共感性類型の分類の結果を表4に示した。その結果、共有型が最も多く、両向型、不全型、両貧型と続いた。いずれも実習前と実習後においての明らかな差はなかった。

これらの結果より、この母集団は共感体験を自己にひきつけてとらえてしまう未熟な共感（同情）の段階にあるものが多いことがわかった。

表2 共有経験尺度と共有不全経験尺度の統計値

	共有経験	共有不全経験
平均値	38.53	32.26
標準偏差	8.57	8.84
中央値	39.00	32.00

角田（1994）作成

(n=302)

表3 共有経験尺度と共有不全経験尺度の結果

	共有経験		共有不全経験	
	実習前	実習後	実習前	実習後
平均値	44.3	43.70	29.8	28.20
標準偏差	9.17	8.66	10.70	13.90
中央値	45.50	42.50	28.00	30.00

(n=20)

表4 共感性類型の結果

共感性類型	実習前		実習後	
両高型 (共有経験高 不全経験高)	7人	35%	6人	30%
共有型 (共有経験高 不全経験低)	8人	40%	9人	45%
不全型 (共有経験低 不全経験高)	4人	20%	4人	20%
両貧型 (共有経験低 不全経験低)	1人	5%	1人	5%

(n=20)

## 2. 共感についての質問紙から

### 1) 共感の概念について

共感の概念の実習前後の内容は表5に示した。実習前では、感情や思いを感じるという内容の中に、考え方を同じくすることという捉えかたをする学生が数名いたが、実習後には感情、気持ち、思いに対して感じるものであるという認識は共通となった。また、自己の感情をのせてはいけないことに関する内容は実習前にはなかったが、実習後には3割の学生がその点について言及している。

### 2) 同情と共感のちがいについて

同情と共感のちがいについて、表6に示した。同情は「かわいそう」という感情に限定したものととらえている点、情けをかけることと言及した点、相手との距離に関しては、同情が近く、共感が遠いまたはその逆もあり、とらえかたに差がみられた。

### 3) 自己評価による共感する力について

自己評価による共感する力の結果は表7に示した。実習前の平均値は3.15、実習後の平均値は2.9であった。実習前から実習後に変化した割合は、高くなった4名(20%)、低くなった11名(55%)、変化なし5名(25%)であった。

### 4) 共感する力を高める方法について

共感する力を高める方法については表8に示した。その結果としては、多くの人とかかわりその思いの理解につとめる、自己覚知、かかわりのふりかえり、物事を客観的に見る力を養う等の記載がみられた。また、真の共感には経験が必要であるため、多くの経験をすることと述べる結果も得られた。

## 3. 学生Aの事例から

### 1) 事例の概要

学生Aは、第1段階実習前に行った共感的経験尺度(改訂版)において、共有経験は高値であったものの、他の学生とは大きく差はなかった。共有不全経験においても高値であり、結果は両高型の判定が出た。第2段階実習後の結果は、共有経験は高値であったものの、共有不全経験は低く、結果は共有型の判定であり、同情のパターンを示した。

次に、学生Aの2段階実習での様子を以下に示す。学生Aの担当した利用者は、Bさん、男性、60歳代前半、老人保健施設に入所し3週間、6人兄弟の末子、配偶者は死亡しており、子どもはなく、在宅復帰は介護者がいないため困難であり、特別養護老人ホームの入所を待っている方である。診断名はパーキンソン病であり、その程度はHoehn-Yahrの重症度分類でIVの段階である。

この利用者とかかわりの中で、学生Aは、食事の場面に疑問を持った。Bさんの食事は、固縮による右腕の動かしにくさにより時間がかかるものの、毎食自力で全量食べることが出来ている。ただし、時間がかかるので、他の利用者より食事の開始が早く設定されている。学生Aが食事の見守りを行うため側についていると、「自分だけ早く食事が出るのはいやである。お願いだから食事の介助をして欲しい。」と懇願されることがしばしばであった。学生Aが介助すると、施設の職員より「Bさんは若く、病気の進行とともに出来ないことが増えていくことが予測される。それを少しでも遅らせるため、今できることはしていただくようにしているので手伝わなくて欲しい。」と助言を受けた。しかし、学生Aはその助言の意味を理解しつつも、実習期間中食事の時間がつらそうなBさんを遠く



表5 共感とは何か (実習前後の比較)

番号	実 習 前	実 習 後
1	話を聞きうなずくだけでも共感だと思う、相手と私が同意見であること。	その人のことを思い考えて自分のことのように相手の立場になること。
2	相手の考えに自分の気持ちをあてはめてから、相手の気持ちを考え同じ思いになること。	相手の気持ちを考え共に感じる。そこに自分の感情がはいってしまったら共感にならず同情になる。
3	相手と何かする中で、楽しい、悲しい等相手と同じ気持ちになること。	相手と同じ気持ちになる。
4	その場の状況でその人を決め付けない。相手の今まで生きてきた歴史を尊重し、しっかりと相手の話を聞くという姿勢を持って考えること。	感情を感じる。頭ではなく心でわかろうとするので、理由がいらぬ。
5	相手の気持ちを知らう、理解しようとする気持ち。	同情のように、自分の同じような経験を重ねて考えるのではなく、その人の思いを共有すること。
6	その人の気持ちに意見するのではなく、受け止め納得する。	相手の感じていること、思っていることなどを側に寄り添い感じ取り、同じ思いで関わること。
7	自分と同じ考えを持っている人。	人の意見を聞き、相手の気持ちになって話をすること。
8	相手の感じていることを受け止めて共に感じる。共感は感情の共有ではないか。	相手の感情を感じ取り、一緒に思いになる。
9	相手の気持ちを感じ取り、自分もその気持ちを理解することしかしその気持ちを理解したつもりでも、つもりでいるだけで、実際には同じときに同じ境遇に立っているものしかわからない。	相手の感じている思いを自分も同じように経験すること。
10	その人(相手)になることはできないが、その人が「こう思っているのではないかな。」とその人の気持ちに近づいて物事を見たり考えたりすることだと思う。	実際にその人と同じ立場で、その物事を経験し感じることは出来ないが、その人の思いに近づこうとし、相手の気持ちになって考えること。
11	同じ思いになること。	一緒に怒ったり、喜んだり、驚いたり、表面上で同じ思いをしたこと、言葉ではない行動や表情で同じ行動や同じ思いをしたこと。
12	相手と同じ思いになること、分かってもらうこと。同じ思いになるために同じことをするのはなく、相手と同じ思いになったらと考え、思いを重ねること。	相手の思いを受け入れて、想いを重ねること。相手を理解し、それが相手にも伝わること。
13	相手が話した内容を自分の頭で考える。その時に、自分がその場にいると感じて考える。そして相手の結論を否定せずに、うなずいたり、笑ったり肯定的な態度で示す。	自分と同じ経験があるからではなく、相手の感情と同じ立場になって寄り添うこと。
14	相手の気持ち、感じたこと、同じように感じたり、思ったりすること。楽しかったり、哀しかったり様々な思いや感情が人にはあると思う。その気持ちを考え、相手の気持ちになってみることで、感じる。	自分の思いを加えず、相手の思いを感じる。
15	相手の感情や考え、視点や立場に思いを寄せること。相手と同じ思いや感情になること。またそれを感じることで、さらには相手の思いや感情などを感じたときに、その感じたことを言葉や表情に表すこと。	その人の気持ちを感じて、一時的に同じ思いになること。
16	共感することとは、相手の思いに気持ちをさせて、どんな風に感じ、どんな気持ちでいるのかその思いをくみ取ってわかり合おうとすること。	その人の思いを受け止め寄り添うこと。その人の思いに自分の思いをはせること。
17	相手の気持ちを受け入れ、相手の思いを理解すること。	相手の感情を取り込み、受け入れ寄り添うこと。ただし、自分の感情に流されず自分はコントロールできること。
18	相手の考えを受け入れ、相手と同じ立場になって共に感じる。相手と同じ考えを持つ。	相手の感情をありのまま受け止める。
19	その人が言っていることを否定せずに、うなずいたりして「私もそう思います。」という対応をすること。その人に気持ちに寄り添うようにこころがけること。	相手の思いを相手の目線から、自分の感情を含まずに見て、相手の思いを感じ取る。
20	相手の立場に立って物事をとらえ、考え、感じていくこと。相手の感じている状況や世界に入り、共に感じていくこと。同じ気持ちになること。同じ気持ちになるように、相手の状況をふまえて考える。	相手の思いを感じとり、共に感じたり思ったりすること。自分の思いをのせたり、おしつけなくて相手の思いを感じていくこと。

から見守りながら、納得できない思いを抱えて実習を終えてきた。

実習指導者の学生Aに対するコメントは、「利用者との接し方、態度は良かったと思います。相手を知ろうとコミュニケーションも多く取れていたように思います。しかし、相手を知ろうとするあまり周りが見えずに突き進むのは危険です。客観的に物事を判断し、何が必要かを見極める力を養って下さい」というものであった。

実習終了後、学生Aは納得できない思いを抱えながら、自己の実習記録を読み返し、その時の利用者の思

いは何か、そこで自分が利用者のどのような思いを受け止め、何を感じたのか、自分はどうすべきであったのかを振り返る作業を始めた。また、以後の講義の中で、自己のかかわりが、共感であったか、同情であったかと問われたときに、自己の体験に置き換え、引き付けて受け止めようとしていたことに気づき、「同情であったのかもしれない」という言葉が、第3段階実習の目標を考える際の筆者とのやりとりの中で聞かれた。

表6 同情と共感のちがいを

1	同情は「かわいそうに」と悲観的に相手をとらえてしまうこと。
2	自分の考え、感情を入れてしまうこと。自分の考えを入れず第三者として冷静にかかわることが共感。
3	自分の気持ちが入ってしまったら同情となる。
4	共感感情を感じることで自分の中からその気持ちがかみ上げてくること。同情は相手をわかったつもりでいる、自分自身の気持ちで思ってしまうこと。
5	同情は自分の経験を重ねて考えること。
6	同情は「かわいそうに」という思いを持ってかかわること。
7	同情は自分の気持ち、経験を入れて話す。
8	同情はその場だけの思いで、共感はその場とその先をみすえて相手の思いを感じる。
9	同情は相手の感じている思いに情けをかけること。
10	同情は、その人と同じ経験をしたことがあって、自分の経験をもとに相手と同じ気持ちになって話を聞くこと。
11	共感したあとには、同じ思いや行動をした喜びや楽しさがある。しかし、同情はただ理解している以上は何もない、一方通行である。
12	同情は相手の気持ちになって考えること。
13	同情は、自分の思いが間に入り、その人と一定の距離をとっている感じ。共感と同じ思いになり寄り添う。
14	自分の思い、気持ちを含めて考える場合は同情になる。含めない場合が共感である。
15	同情は、その人の思いや立場、経験を、それに似た自分自身の経験とだぶらせてその時の感情が再び起こること。
16	同情は、自分が感じたことのある思いにかぶせて同じように感じていること。
17	自分の感情と相手の感情が混在することで、同情になってしまう。自分の感情に流されなければ共感につながる。
18	同情は相手のことを思ったつもりでいる自分自身の気持ちである。
19	「共感」は自分のこれまでの経験や感情を一切入れずに、相手の思いを感じる。 「同情」は自分の経験なども含め、自分の感情も入れ、重ねて、相手の思いを感じる。
20	同情は自分の思いをのせて相手と同じ思いになること。

表7 共感する力 (実習前後の比較)

実 習 前		実 習 後		
番号	数値	理 由	数値	理 由
1	3	対人援助職としてはまだまだだから。	3	対人援助職には必要だが、自分にはまだまだだから。
2	3.5	全てを共感できないから。	2	共感の意味を考えるほど、共感する力に自信がなくなるため。
3	2.5	相手と同じ気持ちになれることもあるがなれないこともあり、場面によって異なるから。	2.5	自分が実際に体験したことや、想像しやすいことは共感できたが、それ以外は難しい。
4	2.5	共感するにはまず自分の感情を知りコントロールできないと受容ができないと思うが、私はまだまだ自分を自己覚知しきれていないので。	1	共感していると思っていたことは、理解や同情にすぎなかったから。
5	3	理解しようとしているが、実際に相手の気持ちを理解できているとは思えないから。	2	同情はできても、共感はできていないと感じたため。
6	4	自己覚知を理解するようになってから、相手の気持ちが少しだけでも理解できるから。	3.6	利用者の言葉や思いを引き出すのが苦手だから、そのため見当違いなことを言って怒らせてしまったから。
7	3	共感できるときもあるが、出来ないときもあるから。	3	共感できているところもあるが、同情になってしまっているところもある。
8	3	あるのかないかわからない。	3.6	人それぞれ感じ方や思いは違っていて、病気や障害があればそれをくみ取るとは困難である。私自身、認知症の方とかかわって共感できたという実感はなかった。
9	3	共感しているつもりでもできていないかもしれないから。	2.5	共感しているつもりでも、できていない気がする。
10	3	まだ共感できているのかわからない状態 自分の年齢に近い人(友達)のことはなんとか共感できるが、子どもや高齢者に対して、できていないと思う。できるだけその人の立場にたってみたいが、自分の気持ちが出てしまうときがある。	4	人の話を聞くと、なるべく自分の思いを捨てるようにし、相手の立場になって考えようとする気持ちは強いほうであると思う。
11	1.5	相手によって異なる。共感できたと思うこともあれば、できなかったと感じることもある。	3.5	相手によって異なる。共感できたと思うこともあれば、できなかったと感じることもある。
12	3	人の話に感動したり、泣いたり、喜んだりするから。しかし、5ではない理由は、対人援助職としてはよくないから4にした。	4	共感したいと思っても、できていたのかわからない。
13	3	経験、想像力がまだ少ない。	3.5	共感のつもりでも考えてみると同情になっていたりする。
14	3.5	相手の立場になって思いを感じることはできると思うが、自分に余裕がない場合、自分のことしか考えられなくなる場合があるから。	3	まだ共感できた、できなかったということが明確ではないことがあるが、その思いと一緒に感じようという姿勢はもっているつもりであるから。
15	3	共感しようとして、相手の考えや感じ方を分かろうとしても同じ気持ちになれないときもある。しかし、相手の気持ちは考えるようにしている。	3	共感できると思っていたが、同情との区別がわからなくなったので、中間の3にした。
16	4.5	相手の信頼を得るためには、相手の気持ちを受け入れ、思いをはせることが大切だと思い、常にそのことを意識して生活しているから。	3.5	まだ、その人の思いに思いをはせきれてなくて「共感しようとしている」ときが多いように思うから。まだ、「共感しているふり」になっていると思う。
17	6	相手の悩みを聞いた際に、私の意見を押し付けるのではなく、相手の立場になって考えるようにしている。そのことで、より相手の気持ちを理解できると思う。	5	相手を受容しようとし、そのことで相手の気持ちが少しでも楽になって頂きたいという相手と向き合おうとする気持ちが私の中にあるため。
18	4.5	相手のことが詳しく知りたいため相手のことを考える。	2.5	友人など年の近い人ならば共感できるが、お年寄りの歴史などがわからないため、あまりできない。
19	2.5	共感しようとするが、自分の思っていることを相手に押し付けてしまって共感する姿勢でいられないときがたまにあるから。	2	いままで「共感している」と思っていたことが、本当は共感ではなく、同情であり、本当に共感したと思う場面がなかったから。
20	2	相手の気持ちを聴き、同じように感じていけるときもあるが、自分の気持ちが先立ち、相手に否定的な言葉を言っている時もあると思ったから。	1.5	共感しているつもりであったとしても、実際には同情であったりできていないと思うから。
平均	3.2		2.9	



## IV. 考察

## 1. 同情からみた共感

有光(2005a)は、同情について相手の感情に反応して、見ている側も感情反応を表すが、そのとき見ている側の感情経験が相手の感情と同一とは限らない。そのため、感情経験が正確に理解されていないため、同情された相手は「わかったつもりにならないでほしい。」という否定的な反応をする可能性がある、と述べている。ここでいう、「わかったつもり」という表現が同情を適切に表現しているといえる。

実習を体験することで共感性は高まるであろうという仮説をもとに共感経験尺度(改訂版)による調査を

行ったが、有意ととれる変化はなく、むしろわずかではあるが、数値は低下した。この理由として考えられるのは、以下の2点である。

1点目に、角田(1994)は、共感性質問紙に必要とされる5つの観点の中で、「共感的な内容は社会的に望ましいと考えられ、偽りの反応が生じる可能性がある。その効果をできるだけ除くため、過去の経験という制約を持たせる。」と述べている。介護を学ぶ学生にとって、共感という概念は、耳慣れてはいるが、自己の中でまだ明確にならないもやもやしたままの概念であるといえる。理解はしにくい、必要性はわかるという過程のなか、「こうあるべき」という観念が内

表8 共感する力を高める方法

1	相手への思いやり、相手のことをどれだけ考えるか。
2	多くの情報を持ち、広い視野で物事を見て冷静に判断すること。
3	相手の気持ちを知り受け止める。
4	理性や理屈で相手の内的世界を解釈しない。
5	年齢など関係なく、多くの人とかかわりをもつこと。
6	利用者が気持ちを自然に口に出すことができる空気を作り、よく話を聴き、気持ちの理解につとめる。
7	利用者の情報収集をし、昔の生活を聞くことで、利用者の考えがわかるようになると思う。
8	多くの人とかかわり、相手の思いをくみ取る。自己覚知。心を開く。
9	真の共感を経験していないとできないと思うから色々な経験をすること。人の表情を見て感じ、自分も相手の思いを考える。
10	自分自身がある程度の経験がないといけないと思う。例えば成功ばかりする人の気持ちはわかりにくいと思うし、努力している人がしていない人の気持ちはわからないと思う。そのため、それなりの失敗や成功の経験は必要である。
11	相手を知ること。
12	相手をわかりたい、理解したいという思い。どれだけ相手と心を通わせることができるか。
13	共感とは何かをよく考えて、共感するという意味を知っていく。
14	日々の生活の中で、自分が今、共感したのかなど振り返って考えることや共感について理解しておくこと。
15	いろいろな人のいろいろな話を聞き、その人の思いや立場を考える。
16	いろいろな人と話し、様々な人間の感情に触れる。映画や本を見る。人が思っていることや気持ちの変化を感じようと努力する。
17	「観察」することが必要である。今の状況、場面をしっかりと見る。
18	字幕なしの映画を見る。表情、行動などから相手の気持ちを知る。
19	自分のことをよく知り、自分のコントロールをきちんとする。また、物事を客観的に見る力を養う。
20	その人に生活背景やその人の状態や様子を含めて把握し、幅広い視野で見て感じる必要がある。

在したことが、共有不全経験の数値の低さの一端ではないかと考える。また、経時的に同一者の経過をたどり、比較したいという目的から、記名を求めたことも、わずかながらその操作につながった可能性がないとはいいたい。

2点目は、尺度が示すように、わかったつもりになっている未熟な共感の段階であることである。第1段階実習では5日間、第2段階実習では18日間の体験をした。時間の長さに加え、孫・曾孫の年齢の学生が、緊張しつつもかかわりをもとうとすることに対して、利用者が精一杯応えようとする暖かい応答をとらえちがいし、気持ちが変わった、共感できた、と勘違いしていたのではないだろうか。このことは、共感する力が実習後に高まったと自己評価をした4名の学生の共感性の類型が、共有型3名、両貧型1名であったことも、その未熟さを示唆していると考えられる。

## 2. 共感、同情の概念の伝え方について

第2段階実習終了後より教員は、学生とともに実習を振り返り、共感できたと記録に残した学生に対して、何に対して共感したのか、同情ではなかったかについて質問し、検証を促している。本稿において、学生の変化の軸を介護実習においているが、その体験をふまえた上に展開されるカリキュラムとの関連性についてここで触れておく。

介護概論、社会福祉援助技術特演、老人・障害者の心理での講義を通して、また、老人・障害者ケア特演における認知症の方とのコミュニケーション法であるバリテーションの講義や、実際に施設で働く方による体験談で構成された講義より、実習で体験したことを振り返り、そして理論につなげていく学びの場がそこにある。その中で、「共感のありよう」「同情との違い」について、それぞれの講師が伝えている。しかし、今回の質問紙の回答から、伝えきれていないと読み取れることが2点あった。

1点目は、共感できたかどうかの評価についてである。相手の全てに共感するということは不可能であり、共感できたかどうかは、相手が共感されたと感じることでしか測ることはできない。有光(2005a)は、相手に共感した状態というのは、相手の感情を見たり聴

いたりしたあと、相手の感情経験の内容を相手に返したときに、相手が「そのとおり」と納得できるときである、と示している。回答の中に、1名だけが「自己を感じた思いが相手に伝わること」と定義づけたが、他の回答にはその点について言及できていなかった。

2点目は、同情の概念についてである。「かわいそうに」という否定的感情で相手をとらえることと理解している回答が数名存在したことから、限定された感情のみに起こることではないという理解を促す必要があるといえる。

## 3. 共感をうみだすもの

回答に挙げられた共感する力を高める方法をまとめると、人と多くかかわり、多くの経験を積み、かかわりの場を振り返り、さらに、自己覚知を促すという結果となった。

有光(2005b)は、共感性を高めるためには、役割取得ができる知的な能力と、他人の感情反応を見て、それに反応することで感情を経験するといった能力が必要であると述べている。それらは、経験(学習歴)や価値観もとづく、と述べている。また、近接領域の看護師が感性を磨く方法について宮本(2003)は、自分を取り巻くさまざまな環境からくるさまざまな刺激への敏感さであり、もう一つは刺激の意味を深く読み取る解釈能力である。これらを身につけるうえで、もっとも有効な学習方法は、自分が実際に体験した看護場面を再構成し検討することだろう、と述べ、また、角田(1998)は、通常共感とは体験面に重きがおかれるが、さらにその体験を「とらえなおす」ことによって共感的理解へと移行する、と述べている。

共感性を高める方法としては、役割取得ができる知的な能力の研鑽、自己の価値感に気づくこと、場面の再構成やとらえなおしを常に意図的に実践し続けることであると考えられる。

## 4. 事例からの学び・まとめ

介護を志す学生の多くは、「自分も人の役に立ちたい」という思いを持っている。その思いが強ければ強いほど、自分と相手との関係性の中だけで、何かを解決しようとする危険性がある。また、相手のためにと

思っていることが、実は自分の満足のためであったり、自分が相手から良く思われたいという無意識の感情が働いている場合もある。

学生AがBさんとのかかわりを通して出会ったような場面は、今後介護に携わる場合に遭遇することが予測される。学生Aが悩むのは当然であり、そこに疑問を感じず見過ごすことができるのであれば、そのことのほうが問題である。老人保健施設への入所間もないこと、進行性の病気に対する不安があること、リハビリに対して意欲的であること、この先施設という環境で生活していくことが確定していること等、Bさんを取りまくさまざまな背景を考慮したうえで、では、食事への支援をどうしていけばよいのかということを考えていく必要がある事例である。

学生Aは、「食事を食べさせてほしい」というBさんの要求に、「リハビリは頑張っているのだから、食事は介助して気持ちよく食べて欲しい」という解釈をのせて、「あんなにつらそうなのに、介助すべき」と判断していた。しかし、Bさんの背景をふりかえり、実習指導者の助言の意味を考え、巡回担当教員との面接を繰り返し、そこに、講義や演習での振り返りが加わり、「Bさんを見ている自分がしんどかった」「リハビリを頑張っているBさんの思いを深く知ろうとしていなかった」「食事を介助するにしても、目的を明らかにして方法やタイミングを考えることが必要であった」という気づきにたどりついた。

この学生Aとのかかわりを通して、実習の体験そのものが共感性を高めると仮説を立てていた筆者の考えがいかに浅いものであったかに気づかされた。実習で体験したことを一歩引いた形で振り返り、かかわりの場면을再構築することで、事例を多角的に概観することができる。そのことで実習現場での指導の意味が深まり、さらに共感の概念や同情との違いという観点で考察を深めることで、その時の利用者の気持ちが見えてくるのである。

これらのことから、共感性を高めるためには、上述したような一連の流れをたどることができるような道筋をつけ、そこで得られる気づきのひとつひとつを丁寧につなげようとする過程を大切にしていくことが、指導していくうえで必要であるということが理解できた。

## V. おわりに

本稿では、介護福祉士養成施設（保育士養成施設等卒業生1年課程）に在籍する学生に対し、同情という視点から、共感を概観し、共感経験尺度改訂版と質問紙による調査を行った。その結果、同情の傾向の強い共有型がもっとも多く、共感と同情の概念も曖昧であることがわかった。また、実習前と実習後では、自己評価による共感する力では実習後に低下が見られた。しかし、それは同情という概念を通して今まで共感していたと考えられていたことに疑問を感じ、場面を再構築するきっかけとなったためであることが考察された。

今回の研究から、共感の理解には、同情の概念とあわせて理解を促すことで、その曖昧さが改善していくことがわかった。しかし、質問紙の分析方法や、尺度の選択の適切さという点に課題が残る。今後は、場面の再構成により共感性が高まる過程を明らかにすることで、共感性の理解を促すカリキュラムの構築を目指していきたい。

なお、本研究の一部は平成19年度文部科学省私立大学教育研究高度化推進特別補助・学術研究高度化推進経費（共同研究代表 大石 正）を使用して行われたことを付記する。

## 引用文献

- 有光興記（2005a）「臨床心理を基本から学ぶ」, 北大路出版, 39-40
- 有光興記（2005b）「臨床心理を基本から学ぶ」, 北大路出版, 39-40
- 角田 豊（1994）共感性尺度改訂版（EESR）の作成と共感性類型化の試み, 教育心理学研究, 42, 193-200
- 角田 豊（1998）「カウンセリングと共感体験」, 福村出版, 46-47
- 鈴木剛士（2007）介護福祉士の実習指導の立場から, ゆたかなくらし, 7, 35-39
- 高島平三郎（1908）「応用心理学講和」, 同文館, 332
- Davis, M, H（1999）「共感の社会心理学」(菊池章雄

訳), 川島書店, 37

松本幸子・吉田恵理子・高比良祥子・片穂野邦子

(2001) 実習指導者が考える臨地実習で学生に学んでほしいことは何か, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 2, 85-90

宮本真己 (2003) 「援助技法としてのプロセスレコード」, 精神看護出版, 16-18

#### 参考文献

石田一紀 (2002) 「介護における共感と人間関係」, 崩文社

小林孝雄 (2004) 「状態」としての共感的理解の定義を再考するーロジャーズ記述の比較検討ー, 人間科学研究, 26

首藤敏元 (1985) 児童の共感と愛他行動, 心理臨床学研究, 33

橋本秀美 (2005) 肯定・否定感情に着目した共感性尺度の開発, 心理臨床学研究, 22

林 智子 (2005) 相手の立場に立つとは?ー共感に対する認識の分析ー, 岡崎女子短期大学研究紀要, 38